



日本軍閥興亡史

下巻

松下 芳男 著



日本軍閥興亡史

工业学院图书馆
藏书章

下卷

松下芳男著

著者略歴

松下芳男 (まつした よしお)

明治25年新潟県生まれ。大正2年陸軍士官学校卒業(25期)。大正9年退職(歩兵中尉)。大正13年日本大学法学部卒業。工学院大学教授、のち名誉教授。法学博士。昭和58年没。

『明治軍制史論』(有斐閣、昭和31年)、『乃木希典』(吉川弘文館、昭和35年)、『日本陸海軍騒動史』(土屋書店、昭和40年)、『日本の軍閥像』(原書房、昭和44年)、『三代反戦運動史』(光人社、昭和48年)、『日本国防の悲劇』(芙蓉書房、昭和51年)、『近代日本軍人伝』(柏書房、昭和51年)、『昭和の軍閥像』(土屋書店、昭和55年)、ほか多数の著書がある。

※本書は『日本軍閥の興亡』(昭和59年刊)の新装復刊です

にほんぐんぱつこうぼうし
日本軍閥興亡史 <下>

2001年5月30日 第1刷発行

著者

まつしたよしお
松下芳男

発行所

(株)芙蓉書房出版

(代表 平澤公裕)

東京都文京区白山1-26-22 (〒113-0001)

TEL 03-3813-4466 FAX 03-3813-4615

印刷/モリモト印刷 製本/小高製本工業

ISBN 4-8295-0285-1

再刊によせて

「日本軍閥」とは何か？ 大東亜戦争後の教育を受けた者は、「日本人民を戦争に駆りたて、敗戦に導いた、軍部のこと」「血に飢えた獣のようにアジア侵略を行った軍人」と、答えるだろう。なぜなら、そうとしか教えられていないのだから。甚だしきに至っては、東京戦争裁判史観を受け売り、「アジア支配のために、侵略戦争を共同謀議した一部の軍人ども」と答えるだろう。

しかし、考えてみればすぐ分かることなのだが、自らの祖国を敗戦に導こうとする軍人が世界のどこにいるのだろうか。国家の隆盛を願い、国運の発展を願っていたのは事実である。ましてナチス・ドイツのような一党独裁ではなく、共同謀議など転勤等により、したくともできようはずはなかった。このような問題を含め、現代の日本は不幸なことに「軍事」について教育がなされていない、否、教育できないと言ったほうが正確だろう。政治と軍事の関係すら理解し得ない跋行的思考、というより、論理ではなく一種のヒステリー的感情で判断する、非国際人を生み出している文部省と、それを左から補完している組合によって、現状として歴史への正当な評価がなされているとは、到底言えない。そのため、言葉のなんとなく響きのよい「ゆとりの教育」「生涯教育」「平和」などがもてはやされ、結果として何も知らない、知りたくない、言われたことしかできない子供達（大学生も含めて）が拡大再生産されている。さて、この「軍閥」という言葉にも、さまざまな解釈があると思うのだが、著者・松下芳男氏は本書では「軍政の限界を越えて、一般国政の上に重圧を加えた政治的軍人」と定義している。

本書は、明治維新から昭和に至るまでの、この「政治的軍人」について事細かに論評している。なぜなら、賢明な読者諸兄にはお分かりのことと思うが、これはある意味で「日本」という国の軍事史のみならず政治史ともいえるものだからである。徳川の幕藩体制・封建制を打ち破り近代国家建設に移行する時に、決定的に必要なだったのは「国の安全保障」であつたことは論を待たない。なぜなら奴隷には国家は存在せず、政府も存在しないのだから。辛うじて独立を維持できた明治維新時には、志士一人ひとりが弾丸の下を潜つた軍人であり、政治家でもあつた。それゆえに、維新に功績のあつた長州・薩摩出身者が新政府の国軍幹部として、あるいは国政を担当するものとして重用され、次第に閥を形成していく。しかし弾丸の下を潜つただけあつて、バランス感覚の良さにより、政戦両略の機微を承知し、日清・日露の両戦役に大勝したのである。

しかしながら、軍人も今風に言うなら「公務員」（誤解のないように言えば、軍人は決して公務員ではなく、あくまでも天皇の軍人である）である。いつまでも薩の海軍、長の陸軍ではいられない。制度が整っていくにしたがい、大学校卒業などの優秀な者が主要なポストに就き、横断的な同志的結合によつて「軍閥」が再形成され、内部抗争にまでさえ発展していく。この辺の微妙な流れは、あたかも火山のように、時には大爆発となり、あるいは感じないほどの地震となつて国内外の情勢、経済の情勢とも連動して終戦まで続いていったのだ。さらに大正デモクラシーの反動として、昭和期に入ると対外的な絶頂期とは裏腹に、特に陸軍を中心とする政治へのあからさまな干渉、「統帥権の独立」の弊害とも呼べる「統帥権干犯」問題、国家改造というクーデター問題など、「死に至る病」は一気に加速していった。このことに關して松下氏はこうも述べている。

「その政治上の軍勢力は、必ずしも不法のものとはいへなかつたが、世論に強く糾弾されたものは、時にその軍勢力

が不当に発動して、政治を歪曲したことである。その不当の軍事力を発動した原動力こそ、軍閥である。ここにおいて日本軍史上、とくに抽出して研究されなければならない問題が、軍閥の興亡であることが痛感されるのである。」
このように、冷静にそして何より確固たる史観を持つて、分析・研究された結実として本書がある。上記したように、個々の軍人の歴史への関わりを丹念に拾われることで、「日本軍閥」の消長だけでなく、現代日本へ至る道程を明示した、いわば日本近代軍事・政治史の人物的エッセンスともいえる本書は、この時代をひもとく際の貴重な一冊として後世に伝えねばならないだろう。

自らの浅学菲才を省みず縷縷述べてきたのは、現在の日本のおかれている状況が、一世紀前の、日本の姿に非常によく似ているからである。とすれば史実の検証だけでなく、松下氏のように、明確で確固たる史観を持つてことにあたるのが、現在のそして未来の日本を見定める唯一の道と信ずるからである。読者賢兄の御賢察を乞いたい。

平成十三年五月

福川 秀樹
(軍事史学会員)

第七章 薩長軍閥の退潮

軍部大臣制の改正 15

一、山本の後継者斎藤実 二、西園寺内閣の倒壊（第十四例）

三、第三次桂内閣の組閣難（第十五例） 四、桂内閣の倒壊と軍制

五、山本内閣の軍部大臣制改正（第十六例）

軍閥巨頭の没落 34

一、シーメンス事件と山本首相（第十七例） 二、清浦内閣の流産事件（第十八例）

三、大隈内閣の軍政容認（第十九例） 四、八代海相の海軍廓清

五、宮中某重大事件と山県 六、薩長の陸海軍元帥 七、元帥級の陸海軍大將

陸軍の新旧軍閥の交代 57

一、寺内内閣と米騒動 二、原内閣の組閣難（第二十例） 三、上原軍閥の台頭と転落

四、藩閥的軍閥と交代した陸大閥 五、長閥の後継者田中義一（第二十一例）

六、陸の名将か庸将か（二）

海軍の新旧軍閥の交代 79

一、薩閥最後の牙城、斎藤実（第二十二例） 二、加藤友三郎の新時代

- 三、薩閥の残光、財部彪
- 四、佐賀閥に期待された人物
- 五、山本権兵衛の再起
- 六、海の名将か庸将か（三）

第八章 植民地の軍閥政治

明治時代の植民地政治（第二十三例） 101

- 一、長閥と軍閥政治
- 二、台湾の軍閥政治（一）
- 三、朝鮮の軍閥政治（一）

- 四、満州の軍閥政治（一）
- 五、樺太の軍閥政治

大正時代の植民地政治（第二十四例） 113

- 一、青島の軍閥政治
- 二、台湾の軍閥政治（二）
- 三、朝鮮の軍閥政治（二）

- 四、満州の軍閥政治（二）

昭和時代の植民地政治（第二十五例） 124

- 一、台湾の軍閥政治（三）
- 二、朝鮮の軍閥政治（三）
- 三、満州の軍閥政治（三）

第九章 大正の新軍閥

陸軍の新軍閥 137

- 一、田中軍閥とシベリア出兵（第二十六例）
- 二、山梨陸相の陸軍整理
- 三、新軍閥の代表者宇垣一成
- 四、宇垣軍閥の形成
- 五、陸の名将か庸将か（四）

- 一、大正昭和平時の元帥
- 二、海軍の太陽東郷平八郎(第二十七例)
- 三、条約派と非条約
- 四、田中義一の政治家転身
- 五、陸の長閥の没落
- 六、陸軍の派閥
- 七、海軍の派閥
- 八、陸海軍部の対立
- 九、幼年学校と軍閥
- 十、陸の名将か庸将か(五)
- 十一、海の名将か庸将か(四)
- 十二、陸軍大将と期別
- 十三、海軍大将と期別
- 十四、陸海軍人の政治的関心

第十章 昭和軍閥の興亡

混沌たる昭和軍閥 209

- 一、昭和軍閥は陸軍軍閥
- 二、宇垣一成と三月事件(第二十八例)
- 三、満州事変の勃発(第二十九例)
- 四、荒木時代と十月事件(第三十例)
- 五、上海事変の陰謀(第三十一例)
- 六、荒木軍閥と五・一五事件(第三十二例)
- 七、元帥の復活とその濫造
- 八、神兵隊事件と十月計画事件(第三十三例)
- 九、下克上と軍閥の責任

軍閥と内閣の起伏 241

- 一、荒木の退任と陸軍の派閥
- 二、陸軍パンフレット問題(第二十四例)
- 三、十一月事件とスパイ(第三十五例)
- 四、天皇機関説問題(第三十六例)
- 五、真崎教育総監の罷免
- 六、永田軍務局長の暗殺

七、二・二六事件の勃発 (第三十七例)	八、広田内閣の難産 (第三十八例)
九、軍部大臣制の改正	十、広田内閣の瓦解 (第三十九例)
十一、宇垣内閣の流産 (第四十例)	十二、林内閣の瓦解 (第四十一例)
十三、第一次近衛内閣の瓦解 (第四十二例)	十四、阿部内閣の瓦解 (第四十三例)
十五、米内内閣の瓦解 (第四十四例)	
日本軍閥の終焉 284	

一、東条英機の登場 (第四十五例)	二、小磯内閣の倒壊 (第四十六例)
三、鈴木内閣の終始 (第四十七例)	四、昭和の陸軍大将
五、昭和軍閥と天皇	
六、陸海軍の解体	

参考書名	302
あとがき	303
陸海軍大將表	305
索引	322

日本軍閥興亡史（上） ● 目次

再刊によせて（福川秀樹）

第一章 軍閥とは何か

第二章 薩長軍閥の発生

明治維新と軍閥

薩長軍閥の萌芽

薩長軍閥の進展

第三章 憲法の制定と軍部の特権

憲法の制定と軍制

法令上の軍部の特権

第四章 日清戦争と軍閥

軍閥対政党の抗争

薩長軍閥と戦雲

日清戦争と軍閥

第五章 日露戦争と軍閥

戦後の長閥の台頭

戦後の薩閥の台頭

軍閥の政治上の巨姿

日露戦争と陸海軍

第六章 長の陸軍、薩の海軍

長の陸軍の全盛時代

薩の海軍の全盛時代

軍令の制定と軍閥

陸海軍大将表

日本軍閥興亡史

(下卷)

第七章

薩長軍閥の退潮

